様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００４０２

研究課題名（和文）ソラスタルジア研究を応用した環境表象文化史の構築：アメリカ映画・文学を中心に

研究課題名（英文）Constructing a Cultural History of Environmental Representation by Adopting the Concept of Solastalgia: American Films and Literature

研究代表者
波戸岡　景太（Hatooka, Keita）

明治大学・理工学部・専任教授

研究者番号：９０４５９９９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：グレン・A・アルブレヒトの提唱するソラスタルジアという概念を援用しながら、アメリカにおける環境ドキュメンタリーと文学作品の比較分析を行った。そして、各映像作品から抽出された環境意識のあり方を、トマス・ピンチョンの文学作品における環境表象・動物表象に重ね合わせ、独自の環境表象論を展開した。その成果は、ピンチョンの第一長編V.から最新作Bleeding Edgeにいたる仕事を、リオタールのポストモダン寓話との比較によって論じたThomas Pynchon's Animal Tales: Fables for Ecocriticism (Lexington)という著作に結実する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
環境意識の高まりとともに、さまざまな映画や文学作品が生み出されてきたが、いずれの作品においても、芸術としての価値の高さと内容の政治的な正しさは、必ずしもイコールにはならない。本研究では、人間対自然という二項対立を疑うのみならず、両者を観察する第三者の視線というものに着目し、それがドキュメンタリー映画とポストモダン小説の語りの双方でいかに重要な役割を果たしているかを明らかにし、そうすることで、環境批評（エコクリティシズム）の有用性を高めることに貢献した。

研究成果の概要（英文）：Adopting Glenn A. Albrecht's concept of solastalgia, I did comparative analyses between environmental documentaries and literary works in the United States. I also developed an original theory of environmental representation by overlaying the environmental consciousness extracted from each film onto the environmental and animal representations in the literary works of Thomas Pynchon. The result will be a book titled Thomas Pynchon's Animal Tales: Fables for Ecocriticism (Lexington), which discusses Pynchon's work from his first full-length novel, V., to his latest work, Bleeding Edge, by comparing it with Lyotard's Postmodern Fables.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ソラスタルジア　ノスタルジア　エコ・ネクロフィリア　環境ドキュメンタリー　ポストモダン文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 研究が開始された 2019 年 4 月の時点では、未だ新型コロナウィルスの世界的流行は始まっておらず、従って環境をめぐる言説の中心的な課題は、気候変動に対する根本的な生活様式の変更とその方法であった。そのため、当時の代表的な環境ドキュメンタリーや環境文学のテーマは「気候」そのものをとりあげており、本研究も、そうした作品群が描き出す「ディザスター」を主な分析対象としていた。

(2) しかしながら、2019 年の暮れより、にわかに新型コロナウィリスの脅威が現実のものとなり、環境表象の関心は、ディザスターのような「目に見える自然の脅威」から、ウイルスのような「目に見えない自然の脅威」へとスライドしていった。研究開始からわずか８ヶ月足らずのうちに起こったこうした変化に対応すべく、本研究は、「ディザスター」表象の非人間的な主体、すなわち、「動物」とその表象に注目し、それを「外的な自然」と「内的な自然」の双方のメタファーと捉えることで、当初の計画をより現実と呼応するものにしていった。

２．研究の目的

(1) 本研究は、「環境」あるいは「自然」に対する人間の意識のあり方を、文学・芸術の立場から明らかにすることを目的としている。具体的には、環境ドキュメンタリーを成立される「カメラ」の視点を、文学作品における「語り手」の立場に重ね合わせることで、映像コンテンツと文学テクストの交錯する地点を特定し、そこに時代の環境意識の構造を見出すことを試みた。

(2) さらに、本研究では、ソラスタルジアという環境意識の一種が、従来のノスタルジアといかに異なり、また、いかに同じであるかを明らかにすることをも目的としている。具体的には、トマス・ピンチョンの文学テクストに書かれたノスタルジアに関する記述を、ソラスタルジア的なるものとして読み替え可能かを検証することを試みた。

３．研究の方法

(1) 研究の方法としては、1990 年代に本格化したエコクリティシズムの分析手法を踏襲し、その上で、アダプテーション理論を応用した映像コンテンツと文学テクストの比較分析を行った。理論的なアプローチとしては、ローレンス・ビュエルによるレイチェル・カーソン批評を基礎としつつ、「食肉」といった行為に最終的に注目することで、人間と動物の主客を確立させながらもその対立を内側から否定しもするポストモダニズム批評的な知見を作品読解に加えた。

(2) 表象行為というものは、その鑑賞者がいてはじめて成立するものでもあるため、制作された作品が、はたして鑑賞者のどのような感情に訴えかけ、そして作品評価に至らせるのか、その基準となるコンセプトが必要である。本研究では、同時代的存在に対するノスタルジアという感情を概念化した「ソラスタルジア」を導入することで、作品に内在する環境意識の分析を行った

４．研究成果

(1) 本研究の成果の一つ目は、論文“For Whom the Environmentalist Shoots: Documentary and Adaptation”（2020）にまとめられている。ヴェルナー・ヘルツォーク監督作品『グリズリー・マン』を中心に、動物と人間の生死を介した関係性の映像表現を、上記の研究目的と方法により読み解いた。本論文では、環境ドキュメンタリーにおいては、しばしば「語り手」と「制作者」と「主人公」が同一視される傾向にあることを指摘し、その主観性について議論を展開した。比較対象となる作品としては、日本のイルカ漁に取材した『ザ・コーヴ』や、ディカプリオ主演の劇映画『レヴェナント: 蘇えりし者』を論じた。

(2) 本研究の成果の二つ目は、2022 年 10 月に刊行予定の単著 *Thomas Pynchon’s Animal Tales: Fables for Ecocriticism* にまとめられている。本書は、本研究開始以前より続けられてきた筆者のピンチョン研究（博士号請求論文を含む）の成果を、今回の研究結果に照らし合わせて大幅に加筆改稿した箇所を前半に配置しつつ、本研究で得られた新しい知見に基づいた独立章 2 つを後半に配置している。また、本書の序章と終章は今回の研究結果をもとに新たに書き下ろされたものであり、これら最新の成果を分量にすると、学術論文 4 本分に相当する書き下ろし原稿が本書には収録されていることとなる。

書き下ろし原稿のうち、序章では、リオタールの『ポストモダン寓話』とカーソンの『沈黙の春』を比較しつつ、両者のあいだに位置するのがトマス・ピンチョンの動物寓話であることを論じた。第 4 章では、『ヴァインランド』と『LA ヴァイス』に通底する問題意識として「保険」という概念があることを指摘し、これがジェイソン・W・ムーアの『生命の網のなかの資本主義』にて展開された環境と資本論に呼応していることを論じた。第 6 章では、『ブリーディング・エッジ』の中における「食肉」への都市生活者の反応を、ジョナサン・サフラン・フォアのヴィー

ガニズムと重ね合わせて検証することにより、アナログとデジタルに二分されたピンチョン文学の作品世界に、もうひとつの「代替肉」的な空間が幻視されていることを論じた。最後に、本書の終章では、ミチコ・カクタニによる「ポスト・トゥルース」批判と同質の視点を、その批判対象のひとつでもあるピンチョン作品の内部に見出すことで、環境ドキュメンタリーに映し出された自然の「フェイク」な表象を受容する、ポスト・ポストモダニズム的メンタリーのありかたを明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 波戸岡景太	４．巻 549
２．論文標題 For Whom the Environmentalist Shoots: Documentary and Adaptation	５．発行年 2020年
３．雑誌名 明治大学教養論集	６．最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 Keita Hatooka	４．発行年 2022年
２．出版社 Lexington Books	５．総ページ数 172
３．書名 Thomas Pynchon's Animal Tales: Fables for Ecocriticism	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関